

國學院大學學術情報リポジトリ

劉知幾系属攷：六朝期彭城劉氏の学問を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-30 キーワード (Ja): 『史通』, 劉知幾, 学問形成, 彭城劉氏, 劉芳 キーワード (En): 作成者: 名越, 健人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000336

劉知幾系属攷

―六朝期彭城劉氏の学問を中心として―

名越健人

論文要旨

本稿は、『史通』^{しつう}を著した唐代の史家・劉知幾^{りゅうちき}（六六一―七二一）の学問形成^{がくもんけいせい}について、彼を輩出した彭城劉氏の祖先と家庭環境とに焦点を当てて考察したものである。

劉知幾の遠祖には、北魏随一の大儒である劉芳^{りゅうほう}がいる。彼は捕虜の身から起家し、礼学・小学に精通していた学問を活かして、北魏・孝文帝の漢化政策のもと活躍した。劉芳の子孫たちも同じく、北魏・北斉において学識を評価されて高官に就いた者もあり、漢文化の受容に努めていた北朝社会で、特定の学問を有した彼らは、歓迎を受けていた可能性があることを指摘し

た。劉知幾の父祖に至り、文苑伝に名を連ねる才筆の誉れ高い人士が見られるようになり、従祖父の劉胤之は国史編纂にも携わっていた。このような好学の士を輩出した彭城劉氏の伝統は、劉知幾の学問形成に大きな影響を与えていた可能性がある。ただし、その一方で彼の学問研鑽が、「師訓を假ら」ない独創的で比較的自由度の高いものであったことも重視すべきであることも指摘した。

【キーワード】『史通』^{しつう} 劉知幾^{りゅうちき} 学問形成^{がくもんけいせい} 彭城劉氏^{ほうじょうりゅうし} 劉芳^{りゅうほう}

一、はじめに

後漢から六朝期における中国の学術の変容について、吉川忠夫氏は後漢以降、教学の中心が太学から地方の学塾等に移っていったとして、その具体的な拠点の変化を以下のように指摘している。¹

かく學術の拠点が中央から地方に移ることは後漢時代から六朝時代にかけての趨勢であつたのであり、さらにはまた地方に根を有する際立つた「家族（門閥）」が學術を担う拠点となつたのであつた。

さらに「六朝時代になると、「家学」と呼ばれるべきものの存在を経学以外の広い分野に指摘できる」とも述べる。つまり、後漢以降、學術の場が地方、延いては「家」に向かつたとし、祖先より継承された學術である「家学」が形成されていった、と指摘しているのである。この吉川氏の指摘を踏まえれば、南北朝・隋唐の學術の担い手を検討する際は、その學問形成に資した家庭環境をも考察の対象とする必要がある。

さて本稿は、初唐・盛唐期に活躍した史家・劉知幾（六六一―七二一）の學問形成の検討を行うものである。彼の學問形成に関する先行研究は、劉知幾が受容した書物についての考察は多いものの、管見によれば彼の一族とその動向や劉知幾への影響の程度について専門的に論じたものは皆無に等しいというのが実情である。²

そこで、本稿は劉知幾の學問形成について、如上の「家学」という視座に立つて検討していきたい。劉知幾の本貫は徐州彭城（現在の江蘇省徐州市）とある。³ 彭城劉氏は漢室を淵源に持ち、好学の士や高官を多数輩出した名門漢人貴族である。こうした家格は唐代に入ってもなお存続しており、中唐の劉禹錫が中山無極の出であるにも関わらず、『旧唐書』卷一六四の本伝が郡望として彭城の出であると記載したことからも窺い知れる。⁴ このように望族であつた彭城劉氏には、一族内で特定の學術や文化を有しており、劉知幾の學問形成に多大なる影響を与えた可能性が推測される。

以上の問題意識を踏まえて、本稿では北朝に出仕した劉知幾の祖先の人物像を明らかにし、彼らの學術や動向を描出する。それにより、劉知幾の學問形成過程に彼が属した家系が及ぼした影響について考察を加えたい。なお、本稿における北朝とは北魏・北斉を指すこととしたい。各正史の引用は中華書局の点校本に拠つた。⁵ また、彭城劉氏は後漢から六朝期を通して多様な支流が存在しているが、本稿は劉知幾の祖先のみを検討の対象としていることをお断りしておく。

二、彭城劉氏の淵源と系譜

本章では彭城劉氏の淵源と劉知幾に至るまでの系譜を示しておきたい。

彭城劉氏の淵源は漢室の劉氏である。その劉氏の中で彭城を拠点としたのは、漢の高祖の弟、楚元王交の血筋である劉歆の子孫であり、そこから叢亭・綏興・安上里に分かれたらしい⁶。

しかしながら、劉知幾が唱えた説はそれと相違している。劉知幾は、自らの系譜について興味を示していたようであり、いずれも散逸したが『劉氏家史』・『譜考』なるものも著している。さらに『旧唐書』の本伝には、劉氏の出自をめぐる考察が以下のようにある。

…推すに漢氏は陸終の苗裔爲りて、堯の後に非ず。彭城叢亭里の諸劉は、宣帝の子楚孝王囂の曾孫司徒居巢侯劉愷の後より出づれば、楚元王交を承けず。…

…推漢氏爲陸終苗裔、非堯之後。彭城叢亭里諸劉、出自宣帝子楚孝王囂曾孫司徒居巢侯劉愷之後、不承楚元王交。…

『旧唐書』卷一〇二、劉知幾伝

劉知幾は自らの属する叢亭里の彭城劉氏は宣帝の子、孝王囂の曾孫である劉愷を遠祖とし、楚元王交の子孫ではない、としている。この議論は深入りせず一旦措くこととするが、ひとまず彭城劉氏を、後漢前期の劉愷から劉知幾の子までに限定すれば、以下のような系譜を描くことが出来る。

【系譜⁷】（本稿で検討を加えた人物には傍線を示した）



次に系譜の中で各正史に記述がある特徴的な人物の学術や動向を以下で検討し、劉知幾の祖先たちが有した学術・文化を考察していくこととしたい。

三、北朝から唐初における劉知幾の祖先たち

本章では先の系譜に挙げた劉知幾の祖先で特徴的な人物を取り上げ、各正史の伝に基づき各個人の人物像や動向を明らかにする。

はじめに北魏の劉芳について確認したい。劉芳は彭城劉氏を考察する上で看過できない極めて重要な人物である。なぜならば、劉芳が北魏に仕官して以降、それを縁故として多くの彭城劉氏が北朝へと帰順しており、かつまた彼は北魏の学術界随一の学者になるまでに至っており、北朝の学術を考察する上でも重要な存在であるからである。また、彼の官界での活躍は、当時の社会情勢と密接な関係

にあると考えられるため、このことについても同時に論証していきたい。

三―一、劉芳について

『魏書』卷五五、劉芳伝には、劉芳とその子息及び劉僧利、劉世明の伝がある。⁸⁾以下で要点を挙げて彼の経歴を整理しながら検討していきたい。

劉芳の経歴や学問を検討するに先立ち『顔氏家訓』勉学篇⁹⁾に見える劉芳に対する同時代の評価を見ておきたい。顔之推によれば、漢代は経書を研鑽し「卿相」となったもの多数いたが、今はそうではなくなり経書を専修できている者がいない、と指摘する。そうした状況でも経書の専修を達成できている学者を挙げて以下のように述べている。

…洛陽に亦た崔浩・張偉・劉芳を聞き、鄴下に又邢子才を見る。此の四儒は、經術を好むと雖も、亦た才の博きを以て名を擅にす。
…洛陽亦聞崔浩・張偉・劉芳、鄴下又見邢子才。此四儒者、雖好經術、亦以才博擅名。

『顔氏家訓』勉学篇

北魏の都である洛陽にて経学に精通し、博識で高名であった儒者として劉芳を挙げているのである。北朝に身を置いた経験を持つ顔之推の評価から、劉芳は北朝の学术界随一の学者という評価を得ていた人物であったことがわかる。また、『北史』卷八一、儒林伝上の序文には孝文帝による儒学振興において、その一役を担った学者の一人として、筆頭に名前が挙がっている。

(1) 幼少期から北魏への仕官まで

劉芳は如何なる生涯を歩み、如何なる学問を有していたのであろうか。彼の生涯で留意しなければならない点は、南朝から北魏に帰順したことである。では、『魏書』の伝（以下本伝とする）の記述を追って見ていきたい。

劉芳、字は伯文、彭城の人なり。(中略)父の邕、劉駿(宋の孝武帝)に兖州長史たり。(中略)邕劉義宣の事を同にし、身彭城に死す。芳伯母の房に随ひ青州に逃竄し、會たま赦免せらる。(中略)芳の母子梁鄒城に入る。慕容白曜の南して青齊を討つや、梁鄒降り、芳北徙せられて平齊民と爲る。時に年十六なり。南部尚書李敷の妻は、司徒崔浩の弟女、芳の祖母は、浩の姑なり。芳京師に至り、敷の門に詣り、崔芳の流播せるを耻ぢ、拒みて之を見ず。芳窮窘の中に處ると雖も、而れども業尙ほ貞固にして、聰敏人に過ぎ、志を墳典に篤くす。

劉芳、字伯文、彭城人也。(中略)父邕、劉駿兖州長史。(中略)邕同劉義宣之事、身死彭城。芳隨伯母房逃竄青州、會赦免。(中略)芳母子入梁鄒城。慕容白曜南討青齊、梁鄒降、芳北徙爲平齊民、時年十六。南部尚書李敷妻、司徒崔浩之弟女、芳祖母、浩之姑也。芳至京師、詣敷門、崔耻芳流播、拒不見之。芳雖處窮窘之中、而業尙貞固、聰敏過人、篤志墳典。

『魏書』卷五五、劉芳伝

南朝宋に仕えていた父の劉邕は、劉義宣の謀反に連座して亡くなる。劉芳は母とともに逃亡し、北魏の平齊民となった。その時、歳は十六であった。縁戚を頼り京師で南部尚書の地位にいた李敷を訪ねているが、面会を拒絶されている。困窮の中で学業を積み志は篤実であった、とある。

平齊民とは、北魏が支配した青齊地方の漢人達を首都平城の近郊にある平齊郡に強制移住させ監視させた、いわゆる捕虜のことである。¹⁰ここでは北魏の皇興三年(四六九)に慕容白曜の率いる北魏軍が青齊地方を征服したことにより、当地の漢人であった劉芳も平齊民としての生活を余儀なくされたのである。

本伝には、平齊民としての困窮した生活と北魏への出仕の記述が続く。

芳常に諸僧の爲に備われて經論を寫し、筆跡善と稱され、卷直一縑を以てし、歳中に能く百餘匹を入れ、此の如きこと數十年にして、頼りて以て頗る振ふ。是れに由りて德學の大僧と、多く還往有り。時に南方の沙門惠度の事を以て責められ、未だ幾くもな

らずして暴亡する有り。芳因縁もて關知せられ、文明太后召して禁中に入れ、之を鞭つこと一百。時に中官の李豐其の始末を主り、芳の篤學にして志行有るを知り、之を太后に言ひ、太后微かに心に愧づ。(中略)俄にして芳と產(邢產)とに詔して入りて皇太子に經を授けしめ、太子庶子に遷し、員外散騎常侍を兼ねしむ。(中略)芳は才思深敏にして、特に經義に精しく、博聞強記、『蒼』・『雅』を兼覽し、尤も音訓に長じ、辨析疑無し。

芳常爲諸僧備寫經論、筆跡稱善、卷直以一縑、歲中能入百餘匹、如此數十年、賴以頗振。由是與德學大僧、多有還往。時有南方沙門惠度以事被責、未幾暴亡。芳因縁關知、文明太后召入禁中、鞭之一百。時中官李豐主其始末、知芳篤學有志行、言之於太后、太后微愧於心。(中略)俄而詔芳與產入授皇太子經、遷太子庶子、兼員外散騎常侍。(中略)芳才思深敏、特精經義、博聞強記、兼覽『蒼』・『雅』、尤長音訓、辨析無疑。

『魏書』卷五五、劉芳伝

その後、僧侶たちに雇われて仏典の書写をするようになり、彼らと交友を持つようになる。「備書」すなわち仏典の書写は、平齐民の知識階層が自身の困窮を切り抜ける手段として生活の資を得ていた、との指摘もある¹¹。また、劉芳を含む南朝出身の平齐民たちの「備書」が南朝の書法の北朝への伝播・拡散に一役を買っていたとも指摘されている¹²。こうしたことから南朝からの移民・捕虜である平齐民として生活し、「備書」により糊口をしのいだ経験は、劉芳の生涯に大きな影響を与えたものであったことは想像に難くない。ここでの彼の苦学した経験が北魏への仕官の際に大いに裨益したと考えられる。

苦学した劉芳に出仕する機会が訪れた。それは沙門の恵度が起こした事件に連座し、文明太后のもとに召喚されたことによる。その事件を担当した官吏の李豐が劉芳の篤学と志行を高く評価し、太后に助言したことから彼女の心情を動かして、それを契機として北魏に出仕したのである。劉芳が皇太子の侍読となり、經義に精通し「博聞強記」で小学に長じていた、とあることに注目したい。これは年少期の苦学による賜物であると見てよいであろう。

以上が劉芳の幼年期から北魏の官界への出仕までの略歴である。彼は延昌二年(五一三)六一歳で死没するまで、自身の「博聞強記」

な学識を活かして北魏の学校設置や郊祀に関する様々な実務的な上奏を行った。そして彼は経学への造詣の深さから国子祭酒をつとめるまでに至る。先述した顔之推の評価に加え、さらに本伝の賛には「世の儒宗、亦た當年の師表爲り（爲世儒宗、亦當年之師表也）」と記される。『魏書』の撰者である魏収が北魏の名臣に肩入れした筆致であつた可能性が考えられるにせよ、劉芳が経学への造詣が深く、北魏の学术界を代表する位置を占めていたことは確かであろう。

次に劉芳が北魏において果たした意義について、彼の学問と孝文帝の政治政策との関係性に着目して検討していくこととしたい。

(2) 劉芳の学問と孝文帝の改革

先述した幼少から蓄積された劉芳の学識が、北魏の政界で遺憾なく発揮されていたことを物語る出来事が本伝の続きにある。それは、劉芳が南朝齊から亡命してきた王肅¹³と交わした礼をめぐる論争である。劉芳の北魏での活躍と彼の学問傾向を語る上で看過できないため考察を加えたい。

王肅の來奔するや、高祖雅に相器重し、朝野屬目す。芳未だ相見るに及ばず。高祖羣臣に華林に宴し、肅語り次いで云はく「古者唯だ婦人のみ笄^{けい}有り、男子は則ち無し」と。芳曰はく、「經の『禮』の正文を推すに、古者男子婦人俱に笄有り」と。肅曰はく、「喪服に稱すらく男子は免^{ふん}ありて婦人は髻^ざあり、男子は冠ありて婦人は笄ありと。此の如くんば、則ち男子は應に笄有るべからず」と。芳曰はく、「此れ専ら凶事を謂ふなり。『禮』に『初めて喪に遭へば、男子は免あり、時すれば則ち婦人は髻あり、男子は冠あり、時すれば則ち婦人は笄あり』と。俱に時變すれば、男子婦人に免髻・冠笄の同じからざるあるを言ふなり。又冠尊は、故と其の笄を奪ふの稱なり。且つ互言なれば、男子に笄無きを謂ふに非ざるなり。又『禮』内則に稱すらく、『子は父母に事へて、雞初めて鳴けば、纁^{りん}を櫛^{くしけつ}りて笄もて總ぶ』と。茲を以て言へば、男子に笄有ること明らかなり」と。高祖善と稱すること之を久しくす。肅も亦た芳の言を以て然りと爲し、曰はく、「此れ劉石經に非ずや」と。昔漢の世に三字石經を太學に造り、學者文字正しからざれば、多く往きて焉に質す。芳音義明辨なれば、疑わしき者は皆な往きて詢訪す、故に時人號して劉石經と爲す。

酒闌にして、芳肅と俱に出で、肅芳の手を執りて曰はく、「吾少きより來意を『三禮』に留む。在南の諸儒、亟しば共に討論するも、皆な此の義を謂ひて吾の向の言の如し、今往釋を聞き、平生の惑を頓祛す」と。芳の理義精通すること、類皆な是の如し。

王肅之來奔也、高祖雅相器重、朝野屬目。芳未及相見。高祖宴群臣於華林、肅語次云「古者唯婦人有笄、男子則無」。芳曰、「推經『禮』正文、古者男子婦人俱有笄。」肅曰、「喪服稱男子免而婦人髻、男子冠而婦人笄。如此、則男子不應有笄。」芳曰、「此專謂凶事也。『禮』『初遭喪、男子免、時則婦人髻、男子冠、時則婦人笄。』言俱時變、而男子婦人免髻・冠笄之不同也。又冠尊、故奪其笄稱。且互言也、非謂男子無笄。又『禮』內則稱、『子事父母、雞初鳴、櫛纚笄總。』以茲而言、男子有笄明矣。」高祖稱善者久之。肅亦以芳言爲然、曰、「此非劉石經邪。」昔漢世造三字石經於太學、學者文字不正、多往質焉。芳音義明辨、疑者皆往詢訪、故時人號爲劉石經。酒闌、芳與肅俱出、肅執芳手曰、「吾少來留意『三禮』。在南諸儒、亟共討論、皆謂此義如吾向言、今聞往釋、頓祛平生之惑。」芳理義精通、類皆如是。

『魏書』卷五五、劉芳伝

高祖（孝文帝）が開いた宴会で王肅と礼に関する議論を交わした。王肅は『礼記』喪服篇の記述を論拠として、婦人のみ笄（かんざしの一種）を装飾し、男子は装飾しないとされた。しかし、劉芳は王肅の論拠が「凶事」つまり、服喪期間の際に行われるものであるとした上で、『礼記』の記述に基づいて、男子も笄を身に着ける場合があると反駁した。その博識さや正鵠を射ていたことから、北魏の孝文帝（高祖）と王肅は信服した。また、劉芳の経学への造詣はその字句や音義の正確さから、漢の石經に因んで「劉石經」と呼ばれるほどであった。酒宴の後、王肅が劉芳に述べた言葉によれば、南朝の学者たちも王肅と同一の議論をしており、劉芳の説を聞いて平生の惑いが解けた、とある。このことから劉芳の礼学への造詣は、南朝の学者をも凌駕するものであったと考えられる。

ではなぜ劉芳は戦乱に巻き込まれて、平斉民にまで身を落としていたにも関わらず、北魏の官界で華々しい活躍ができたのだろうか。このことについて陳寅恪氏が、当時の北魏孝文帝が南朝の文化・制度を模倣しようとした動きがあったことに要因があると指摘してい

る。¹⁴その孝文帝の政治方針とは、具体的にどのようなものか。それは、「漢」を模倣するいわゆる漢化政策と呼ばれる政治改革の動きである。この改革は多岐に亘る方面で施行されており、例を挙げるならば、「国家祭祀の改革」・「風俗・習俗の改正」・「宗廟制度の改革」等があり、何れも「中国化」を志向するものであった。¹⁵つまり、劉芳は漢の文化を積極的に摂取し、制度改革に努めていた孝文帝の治世のもと、その学問、特に礼に精通していたことを評価されて登用されたと見てよいであろう。

(3) 劉芳の著述

劉芳の学問は多くの著述によっても知ることが出来る。本伝の記述や『隋書』経籍志・『旧唐書』経籍志・『新唐書』芸文志に基づいて示しておきたい。(以下、本伝に著録されているものは、【本伝】とし、『隋書』経籍志は【隋】、『旧唐書』経籍志は【旧】、『新唐書』芸文志は【新】と表記した。)

- ・鄭玄所注『周官儀禮音』【本伝】
- ・干寶所注『周官音』【本伝】
- ・王肅所注『尚書音』【本伝】
- ・何休所注『公羊音』【本伝】
- ・范寧所注『穀梁音』【本伝】
- ・韋昭所注『國語音』【本伝】
- ・范曄『後漢書音』【本伝】【隋】【新】
- ・『辨類』【本伝】
- ・『徐州人地錄』【本伝】【旧】【新】(【旧】【新】は『徐地錄』とする)
- ・『急就篇續注音義證』【本伝】

- ・『毛詩箋音義證』【本伝】【隋】【旧】【新】
- ・『禮記義證』【本伝】【隋】【旧】【新】
- ・『周官義證』【本伝】
- ・『儀禮義證』【本伝】
- ・『漢靈獻二帝紀』【隋】
- ・『廣州先賢傳』【新】

一見して劉芳が經学・史学に亘る幅の広い学識を兼ね備えていたことが窺える。概ね彼の著述の中心は音義が占めており、三礼全てに『義證』を作成していたことから、彼が小学や礼に精通していたことによる成果であると言える。中でも『毛詩箋音義證』と『禮記義證』は彼の代表作であったようであり、今その逸文が清・馬国翰『玉函山房輯佚書』に蒐集されている。¹⁶

さて、ここで彼の著述に音注が多数あることにも注目しておきたい。恐らくこれらは劉芳が漢民族として、胡族が中心を占める北魏の官界において、正確な經書や史書の句読や音を伝える一役を担っていた可能性があることを示唆していると考えられる。もちろん、単に彼の學術の傾向によって生み出されたとも考えられるが、先述した孝文帝の政治改革の一つである「風俗・習俗の改正」によって施行された「胡語の禁止」により、正確な訓詁・音義の伝授の必要に迫られたと見ることも可能である。¹⁷

また、当時の北朝社会には書物が少なく、北魏の孝文帝が書物を南朝の齊に求めていた事実もある。¹⁷ このことに加えて、吉川忠夫氏は北魏の知識人が南朝の典籍を渴望しており、彼らが書物を獲得するのは、困難を極める活動であったと指摘している。¹⁸ こうした北魏の知識階層の読書要求という社会情勢も、広範で深い学識を備えて多様な書物に通暁していた劉芳が、北魏で歓迎を受けた大きな社会的要因とするに足るのではないのだろうか。

(4) 劉芳の子息

劉芳の学問は子息達に継承されていたようである。特に懌・廩とその子の鷺は父と同じく学問をもって高名であったことが伝わる。長子の懌については、「父の風有り、頗る文翰を好」んだとあり、劉芳の遺風を継承して次子の廩は「好學」であったとある。さらに彼は『魏書』卷八四、儒林伝の序に「永熙中に、復た國學に釋奠す。又顯陽殿に於いて祭酒劉廩に詔して『孝經』を講ぜしむ、（永熙中、復釋奠於國學。又於顯陽殿詔祭酒劉廩講『孝經』）」とあり、父同様に儒學で身を立てたようである。その子の鷺は「少くして風氣有り、頗る文史に渉」とあり、史學にも通じていたようである。いずれにせよ彼らの学問が父親の劉芳譲りであったことは明らかであろう。

以上、劉芳の生涯と学問を概観した。孝文帝が漢化を志向する政治改革を行った社会背景の中で、劉芳は礼や小学に長じているといった、深い学識を活かして北魏で活躍した。このような北魏における劉芳の活躍やそれに対する名声は、そのまま劉氏一族全体に及んだようである。劉芳の伝の末尾には族兄として僧利、その子息、世明の伝が附され、何れも北魏に帰順した記述が見える。¹⁹ 劉芳が北魏に登用されて活躍したことを契機として、その一族である彼らも同時に北魏に帰順したのであろう。

劉世明の子である劉禕は北魏から北齊へと仕官しており、その子息の劉珉も北齊に仕官している。彼らは劉芳の学問を継承していたようである。次に確認することとしたい。

三―二、劉禕・劉珉（北魏・北齊・隋）

劉世明の学問に関しては劉芳の伝に「頗る書傳に渉る」としか書かれておらず、好學の士であったことはわかるがその実相は知る由もない。しかし、劉世明の子である劉禕については、『北齊書』卷三五に伝があり、彼は劉芳と同じく礼學に精通していたようである。²⁰

劉禕、字は彥英、彭城の人。父の世明は、魏の兗州刺史たり。禕は性弘裕、威重有り、容止觀るべく、昵友密交し、朝夕に遊び

處ると雖も、敬を加へざるは莫し。學を好み、『三禮』に善く、吉凶儀制は、尤も心を留むる所なり。魏の孝昌中に、釋巾太學博士たり。睢州刺史に累遷し、邊人其の威信に服し、甚だ疆場の和を得たり。

劉禕、字彥英、彭城人。父世明、魏兗州刺史。禕性弘裕。有威重、容止可觀、雖昵友密交、朝夕遊處、莫不加敬。好學、善『三禮』、吉凶儀制、尤所留心。魏孝昌中、釋巾太學博士。累遷睢州刺史、邊人服其威信、甚得疆場之和。

『北齊書』卷三五、劉禕伝

劉禕は北魏から北齊に仕え、北魏の孝昌年間（五二五～五二八）に太學博士となる。その後、睢州刺史となり南朝との国境を警備し、辺境の人々はその威信に服した、とある。「學を好み、『三禮』に善く、吉凶儀制は、尤も心を留むる所」であつたことと北魏の太學博士であつたことに注目すれば、劉禕も劉芳と同じく自らの學識を活かして北魏の官界で活躍していたと考えられる。礼に精通していたことは祖父である劉芳より繼承されたものであつたと考えられる。

劉禕の子息の劉珉も北齊で活躍したようであり、「唐贈太子少保劉知柔神道碑」によれば睢陽太守や散騎常侍及び文林館學士に従事していたとされる。文林館とは北齊の後主のもと宰相の祖珽が中心となつて學士を招集し、設立された學術機關である。『北齊書』卷四五、文苑伝の序には、文林館で行われた文化事業である『修文殿御覽』の編纂に携わつた學士の一人として劉珉の名が連ねられている。²¹

このことから劉珉は、当時の北朝における學術・文化の最前線に身を置いていたことを看取できるが管見の限り、彼が如何なる人物であつたかを明確に示す資料は正史にはない。ただし、『宣和書譜』卷一六には彼の學術の一端を示す興味深い記述がある。²²

劉珉、字は仲寶、彭城の人。書法は王氏の羲・獻父子より以來、其の道は浸く以て衰陋し、齊に至りて尤も甚だし。珉は草隸を喜み、遂に能く俗學の謬を一洗す。羲之を遠追して、頗る其の法を得て、落筆の佳處は、往往にして古人を凌轢し、草書を作すに至りては益々勝り、乃ち復た世に名あり。：

劉珉、字仲寶、彭城人。書法自王氏義・獻父子以來、其道浸以衰陋、至齊尤甚。珉喜草隸、遂能一洗俗學之謬。遠追羲之、頗得其法、落筆佳處、往往凌轢古人、至作草書益勝、乃復名世。…

『宣和書譜』卷一六

劉珉が衰微しかけていた王羲之の書法を復興させた能書家であったと伝えている。当時の北朝における書が俗字の横行により、南朝の水準よりも劣っていたことは、顔之推が『顔氏家訓』雜芸篇で「北朝の喪亂の餘は、書跡は鄙陋、加ふるに專輒造字を以てし、猥拙なること江南より甚だし（北朝喪亂之餘、書跡鄙陋、加以專輒造字、猥拙甚於江南）」と慨嘆していることから窺える。こうした中で王羲之の書を習得していた劉珉が北朝社会で大いに歓迎を受けたことは想像に難くない。

以上で検討したように、劉芳以来、禕・珉が有した学術は、礼学や王羲之の書といった漢族の文化の遺薰を漂わせるものであった。彼らが北朝において高位に就いていたのは、もちろん祖父の劉芳の影響によることが大きいが、その背景には北斉で顔之推等が被ったとされる、北朝の人々が抱いた南朝文化への憧憬があったのではないか。つまり、彼らが有した学術や文化が北朝で羨望視され、高く評価されていたという社会的な要因が考えられるのである。²³

こうした学術や文化は、劉珉の子つまり劉知幾の祖父にあたる務本に継承されていたかは、残念ながら確認するすべがない。²⁴ 務本は『新唐書』宰相世系年表に隋の「陳留縣長」に従事していたと記されているのみであり、正史における記述がなく、彼の動向を詳細に示す資料がない。しかしながら、劉知幾の従祖父、従父、父は『旧唐書』に伝があり、それを見れば祖先たちの学術の伝統が連綿と継承されていたことがわかる。

三―三、劉胤之・劉延祐・劉藏器について（隋・初唐）

次に『旧唐書』卷一九〇、文苑伝上に立てられ、劉知幾の従祖父にあたる胤之、従父にあたる延祐、そして父にあたる藏器の伝について検討する。

この三名の伝は『旧唐書』文苑伝に収録されていることから、彼らが文筆の才に長けていたことは明白であり、このことは伝の記述からも窺い知れる。特に隋から初唐を生きた劉胤之は劉知幾と同じく、史書編纂に携わった経歴を持つ注目すべき人物である。劉胤之の伝に以下のようにある。

劉胤之は、徐州彭城の人なり。(中略)胤之少くして學業有り、隋の信都承孫萬壽・宗正卿李百藥と忘年の友を爲す。(中略)永徽の初、著作郎・弘文館學士に累轉し、國子祭酒令狐德棻・著作郎楊仁卿等と、國史及び實錄を撰成し、之を奏上し、陽城縣男に封ぜらる。：

劉胤之、徐州彭城人也。(中略)胤之少有學業、與隋信都承孫萬壽・宗正卿李百藥爲忘年之友。(中略)永徽初、累轉著作郎・弘文館學士、與國子祭酒令狐德棻・著作郎楊仁卿等、撰成國史及實錄、奏上之、封陽城縣男。：

『旧唐書』卷一九〇、文苑伝上

若くして學識を備え、孫万寿・李百藥と厚い親交があり、永徽(六五〇～六五五)の初めには著作郎と弘文館學士となり、令狐德棻と楊仁卿等と國史と實錄とを編纂した、とある。特に關係が確認できる孫万寿は、北齊・北周の大儒であつた熊安生から五經を學んだ學者であり、李百藥は『北齊書』の撰者、令狐德棻は『周書』の主編者である。劉胤之と交友關係を持った人物はそれぞれ、經學に通曉、または史書編纂に従事した者であつた。かつまた劉胤之の自身も著作郎となり、史書編纂に携わつていた。このことから、劉胤之は經學・史學への造詣が深い人物であつたと言える。

次に劉知幾の従祖父にあたる延祐についてである。延祐は官吏、特に刑吏として名を著したようである。

弟子の延祐は、弱冠にして本州進士に擧げられ、渭南尉に累補せらる。刀筆の吏の能あり、畿邑と爲りて當時の冠たり。司空の李勣嘗て謂ひて曰はく、「足下の春秋は甫爾^{わづか}、便ち大名を擅にせんとすれば、宜しく稍や自ら貶抑し、獨り人の右に出づるを爲す無

かるべし」と。(中略) 徐敬業の亂ありて、揚州の初めて平らぐや、刑名有る所は、能く決定する莫し、延祐使を奉じて軍所に至りて之を決す。時に議する者斷ずるに賊より五品の官を受くる者は斬し、六品者は流すと。延祐以爲へらく諸もろの元謀に非ずして、迫脅せられて盜に従ふは、則ち極刑を置き、事枉濫に渉るは、乃ち斷ずるに賊より五品を受くる者は流し、六品已下は俱に除名するのみと。其の全濟を得る者は甚だ衆し。：

弟子延祐、弱冠本州舉進士、累補渭南尉。刀筆吏能、爲畿邑當時之冠。司空李勣嘗謂曰、「足下春秋甫爾、便擅大名、宜稍自貶抑、無爲獨出人右也。」(中略) 徐敬業之亂、揚州初平、所有刑名、莫能決定、延祐奉使至軍所決之。時議者斷受賊五品官者斬、六品者流。延祐以爲諸非元謀、迫脅從盜、則置極刑、事涉枉濫、乃斷受賊五品者流、六品已下俱除名而已。其得全濟者甚衆。：

『旧唐書』卷一九〇、文苑伝上

劉延祐は高句麗征伐などで戦功をあげた李勣から、年若くしてその才を認められた、とある。則天武后期に起きた徐敬業の反乱の平定の際、それに加担した罪人の刑罰を決定した。彼は従来論断されていた刑罰より寛容に処置し、救済された者は多数いたとある。要するに劉延祐は、寛治を推し進めた実務的官僚として活躍したようである。

最後に劉知幾の父の藏器については、やや短く以下にある。

胤之の従父兄の子藏器も、亦た詞學有り、官は宋州司馬に至る。：

胤之従父兄子藏器、亦有詞學、官至宋州司馬。：

『旧唐書』卷一九〇、文苑伝上

劉藏器も「詞学」つまり、文筆の才を有したと伝える。官位は『新唐書』宰相世系年表に比部員外郎とあり、刑部の比部郎中の副職に就いていた。また、『新唐書』卷二〇一、文芸伝上の劉藏器の伝には、以下のような高宗との問答を収録している。

延祐の従弟藏器は、高宗の時に侍御史爲り。衛尉卿の尉遲寶琳人を脅して妾と爲す。藏器効して之を還すも、寶琳私かに帝に其の還を止めしめんことを請ひ、凡そ再び効し再び止む。藏器曰はく、「法は天下の縣衡、萬民の共する所爲り、陛下用捨するに情に繇れば、法は何の施す所ぞ。今寶琳私かに請ひて、陛下之に従ふ。臣公もて効して、陛下亦た之に従ふ。今日從ひて、明日改むれば、下は何の遵ふ所ぞ。彼の匹夫匹婦すら猶ほ信を失ふを憚る。況んや天子をや」と。帝乃ち可と詔するも、然して内に之を銜み、悦ばざるなり。稍やありて比部員外郎に遷す。監察御史魏元忠其の賢を稱し、帝擢任して吏部侍郎と爲さんと欲す。魏玄同沮みて曰はく、「彼の道を守ること不篤なれば、安んぞ之を用ひん」と。遂に出でて宋州司馬と爲り、卒す。

延祐従弟藏器、高宗時爲侍御史。衛尉卿尉遲寶琳脅人を爲妾。藏器効還之、寶琳私請帝止其還、凡再効再止。藏器曰、「法爲天下縣衡、萬民所共、陛下用捨繇情、法何所施。今寶琳私請、陛下從之。臣公効、陛下亦從之。今日從、明日改、下何所遵。彼匹夫匹婦猶憚失信。況天子乎。」帝乃詔可、然内銜之、不悅也。稍遷比部員外郎。監察御史魏元忠稱其賢、帝欲擢任爲吏部侍郎。魏玄同沮曰、「彼守道不篤者、安用之。」遂出爲宋州司馬、卒。

『新唐書』卷二〇一、文芸伝上

劉藏器は尉遲寶琳の脅迫条件をめぐって劾奏を再度行うも、尉遲寶琳の計らいにより却下されていた。そこで劉藏器は高宗に法は帝の私情で乱してはならず、信を失わぬようにすべきである、と諫言した。その後、高宗は魏元忠の進言により劉藏器を吏部侍郎に抜擢しようとしたが、魏玄同の讒謗により宋州司馬に貶謫されたようである。

この記述は劉藏器の人となりを顕著に示していると言える。また、彼が高宗に対して阿諛追従せず敢然と諫言した姿勢は、子の劉知幾が史官の墮落を目の当たりにし、五つの批判を提出して、史職を辞したことと似通うものでもある。²⁶ 他にも『全唐文』（卷一六三）には、「對恤刑策」・「對刑法得失策」・「對往代爲刑是非策」といった政治策問への対策が載せられている。

以上を要するに、劉知幾の従祖父、従父、そして父の伝は文苑伝に立てられていることが示すように、彼らは才筆のある士人であつ

た。従祖父の劉胤之は、当時の史書を編纂した士人たちと関わり、なおかつ自身も史書編纂に従事し、「史学」への造詣が深かったようである。父も自らものした対策文が数條伝わる。そもそも、史書を編纂する者には高い才筆が求められる。劉知幾が史書編纂に携わり、史家として名を馳せることができたこと自体、こうした才筆の誉れ高い親族の影響を濃厚に受けたものであったと言えるであろう。

四、『史通』自叙篇から見る劉知幾の学問形成

以上で検討した劉知幾の祖先が有した学術が、劉知幾の学問形成に与えた影響は如何ほどであったのであろうか。『史通』叙事篇の冒頭には、自身が幼少期に受けた庭訓や青年期の学問研鑽について述べられており、彼の学問形成を知る上で重要な資料であるためここで検討しておきたい。

劉知幾は自身が受けた庭訓について以下のように述懐している。

予れ幼くして庭訓を奉じ、早に文學に遊ぶ。年紈綺に在りて、便ち『古文尚書』を受く。毎に其の辭艱瑣にして、諷讀を爲し難きに苦しむ。屢しば捶撻に逢ふと雖も、而れども其の業成らず。嘗て家君の諸兄の爲に『春秋左氏傳』を講ずるを聞き、毎に『書』を廢して聽く。講畢はるに逮んで、即ち諸兄の爲に之を説く。因りて竊かに嘆きて曰はく、「若し書をして皆な此の如くならしめば、吾復たと怠らず」と。先君其の意を奇とし、是に於いて始めて授くるに『左氏』を以てし、期年にして講誦都て畢はる。…予幼奉庭訓、早游文學。年在紈綺、便受『古文尚書』。每苦其辭艱瑣、難爲諷讀。雖屢逢捶撻、而其業不成。嘗聞家君爲諸兄講『春秋左氏傳』、每廢『書』而聽。逮講畢、即爲諸兄説之。因竊嘆曰、「若使書皆如此、吾不復怠矣。」先君奇其意、於是始授以『左氏』、期年而講誦都畢。…

劉知幾は幼少の頃から庭訓を受け、学芸に触れた。年少になり『古文尚書』を授かるも成就せず、兄たちが『左氏伝』を教授されているのを聞き、俄然興味を示し、父祖より『左氏伝』を授かった、とある。こうした父祖からの庭訓により、『旧唐書』の劉知幾の伝には「兄の知柔と俱に文詞を善くするを以て名を知らる（與兄知柔俱以善文詞知名）」と、兄と同じく文章で名を馳せるようになったとある。これは、劉知幾の学問が、父からの教授無しには形成されなかったことを明示している。先に検討した彭城劉氏一族が有した好学の氣風や伝統は、彼の学問の基礎的な形成過程で多大なる影響を与えていたことは想像に難くないのである。

ただし、彼の学問形成において、こうした家内での伝授のみを強調することはいささか躊躇を覚える。なぜならば、自叙篇に続に以下のように記されているからである。

次いで又『史』・『漢』・『三國志』を讀みて既に古今の沿革・歴數の相承くるを知らんと欲し、是に於いて類に觸れて觀て、師訓を假らず。漢の中興してより已降、皇家の實錄に迄び、年十有七にして、窺覽すること略ぼ周し。其の讀書する所は、多く假賃に因る。部帙殘缺し、篇第遺有ると雖も、敘事の紀綱、立言の梗概に至りては、亦た粗ぼ之を知る。但だ時に於いて將に仕進を求めんとし、揣摩しまを兼習し、諸史に専心するに至つては、我則ち未だ暇あらず。年の弱冠に登るに洎んで、射策もて朝に登り、是に於いて思ひ餘閑有り、本願を遂ぐるを獲たり。京洛に旅游し、頗る歳年を積み、公私に書を借りて、情に恣せて披閱す。：

次又讀『史』・『漢』・『三國志』既欲知古今沿革・歴數相承、於是觸類而觀、不假師訓。自漢中興已降、迄乎皇家實錄、年十有七、而窺覽略周。其所讀書、多因假賃。雖部帙殘缺、篇第有遺、至於敘事之紀綱、立言之梗概、亦粗知之矣。但於時將求仕進、兼習揣摩、至於專心諸史、我則未暇。洎年登弱冠、射策登朝、於是思有餘閑、獲遂本願。旅游京洛、頗積歲年、公私借書、恣情披閱。：

『史通』自叙篇

劉知幾の学的探求の方向は史書へと向かい、實際に歴代の史書を読破したいと考えた、とある。ここでの彼の讀書体験に注目したい。彼は、「師訓を假らず」、つまり先師の教えに依らない独創的な修学姿勢を取り、なおかつ、その書物の多くは「假賃に因る」という貸

与により読書したのである。こうした読書は、科挙への受験に向けて一度途絶えたようだが、科挙登第後もまた続き、余暇を得ては都で「公私に書を借り」て意のままに総覧した、とある。

こうした書物を「仮賃」していた劉知幾の読書体験について、井上進氏は「れっきとした家柄を誇る貴族の子弟であったがゆえに」できたことであり、「彼が家柄と官位の双方を具備した、真正正銘の特権階級なるがゆえに実現できたこと」であったと指摘している。²⁸つまり、劉知幾が生きた初唐も六朝期以来の貴族制が根強く存在しており、読書ないしは学問も貴族の子弟のみに限られた閉鎖的なものであったのであり、劉知幾の読書も家格の高さがあってこそ実現できたのである。

ただし、読書自体が貴族階級に限られたものであったとしても、「師訓を假らず」、「假賃に因る」という劉知幾の読書の姿勢は、彼が旧来の学説を墨守しない、比較的自由的な学問を形づくる契機となったと考えられないか。『史通』に旺盛な經書への批判や、旧来の学説への疑義が散見されるのもこうした彼の読書体験に起因しているのではないか。²⁹もちろん、彭城劉氏が有した伝統が彼に与えた影響は、多大なものであったと想定されるが、一方で彼の学問の研鑽期における読書体験も看過してはならないことなのである。

五、おわりに

本稿で考察した結果をまとめると、以下の通りとなる。

- ① 劉知幾の系属である彭城劉氏は、漢室を淵源として、代々好学の士や高官を輩出した望族であり、南北朝隋唐を通して概ねその家格は変わらない。
- ② 南朝の貴族であった一族は梁末の混乱に巻き込まれて、劉芳は平斉民すなわち北魏の捕虜としての生活を余儀なくされた。しかし彼はこうした苦境の中でも学問に励み、特に礼学・小学に精通し、北魏に仕官して大儒として活躍した。この背景には、北魏孝文帝が推進した漢化を志向する政治改革や、漢文化を歓迎する社会情勢といった北魏の社会的要因があった。
- ③ 劉芳の子息や親族も北魏に帰順し、彼らも劉芳の学問を継承していた。さらに劉禕・劉珉も劉芳と同じく、礼学や王羲之の書法と

いった自らの有した学術や文化をもって北朝社会に歓迎を受けたと想定される。

- ④ 劉知幾の従祖父、従父、そして父の世代に至ると才筆の誉れ高い士人を輩出するようになり、従祖父にあたる胤之は史書編纂に携わっている。彼らは劉知幾の学問形成に直接的な影響を与えたと考えられる。

- ⑤ 『史通』自叙篇には、劉知幾が父から受けた庭訓の様子が述べられている。彭城劉氏の祖先が代々蓄積してきた学術や文化が、劉知幾の学問形成に大きな影響を与えたことは確定的である。ただし、こうした側面のみを強調するのではなく、劉知幾の学術の特色を顧慮すれば、彼の大きな学問研鑽期における「師訓を假ら」ない独創的な発想を重視する読書体験も忽視してはならないものである。

特に⑤の劉知幾の学問研鑽期における読書体験は、彼の学術の方向性を決定づけた可能性が高い。さらにこのことは、特定の師より継承された「章句の学」を重視する傾向にあった六朝期から、それへの依存度が低下するようになる唐代後期の学術への形態上の変容を示唆しているのかもしれない。³⁰ こうした、六朝期から中唐期にかけての学術形態の相違に関する考察については、今後の課題としたい。

注

- 1 吉川忠夫氏「六朝時代における家学とその周辺」(小南一郎氏『学問のかたち—もう一つの中国思想史—』汲古書院、二〇一四年)後に『六朝隋唐文史哲論集I』(法藏館、二〇二〇年所収)。引用は『六朝隋唐文史哲論集I』二五六頁から。

- 2 傅振倫氏『劉知幾年譜』(商務印書館、一九五六年)三「劉知幾之家世」(二〇頁～二六頁)では、旧来の学者同様、劉知幾の学術家学に淵源するとした上で、親族や子息に関する資料が蒐集されている。ただし、その範囲が従祖父・祖父・父・兄・子息・孫のみに限られている。許凌雲氏『劉知幾評伝』(南京大学出版社、二〇一一年)第一章「命世大才」(二四頁～一五頁)には劉知幾の家系は「書香門弟」として、従祖父・父・兄の人物像を描き出している。

このように先行研究では、検討対象が劉知幾の父祖や兄に限られており、かつ家学が劉知幾へ与えた影響の程度についても不明瞭である。

3 『旧唐書』巻一〇二及び『新唐書』巻一三二の劉知幾伝。

4 劉禹錫の別集である「劉賓客文集」の『四庫全書総目提要』（商務印書館、一九七一年）集部三別集類三には「唐書禹錫本傳、稱爲彭城人。蓋舉郡望。實則中山無極人」とある。ただし、「子劉子自伝」『劉禹錫集（中国古典文学基本叢書）』（巻三九）によれば、遠祖は中山の出とするが、籍貫は洛陽としている。また、池田温氏「唐代の群望表（上）」（『東洋学報』巻四二、第三号、一九五九年）（七九頁）に彭城郡六姓に劉とある。

5 『魏書』（中華書局、一九七四年）・『北齊書』（中華書局、一九七二年）・『隋書』（一九七三年）『旧唐書』（中華書局、一九七五年）・『新唐書』（中華書局、一九七五年）に拠った。

6 『元和姓纂』（中華書局、二〇〇八年）巻五、劉氏の頁。

7 系譜の作成にあたり、趙超氏『新唐書宰相世系年表校集』（中華書局、二〇一八年）、『元和姓纂』（中華書局、二〇〇八年）巻五、劉（彭城）の頁及びその羅振玉・岑仲勉両氏の校注、『魏書』巻五五、劉芳伝及び劉知幾の兄、劉知柔の神道碑である李邕「唐贈太子少保劉知柔神道碑」（『全唐文』巻二六四、上海古籍出版社、一九九三年）に基づいた。また傅振倫氏『劉知幾年譜』（商務印書館、一九五六年）の世系表（一六頁〜一九頁）も参照した。

8 『北史』巻四二にも劉芳の伝がある。なお、北魏の儒学と劉芳の経学については、焦桂美氏『南北朝経学史』（上海古籍出版社、二〇〇九年）第一章「関于南北朝経学的宏観考察」第四節「経学家的遷徙与南北朝経学」及び第三章「北朝経学」第一節「北朝経学發展概況」第二章「北朝経学風尚之變遷」を参照した。

9 以下の引用は『顔氏家訓集解』（上海古籍出版社、一九八〇年）に拠る。

10 「平斉民」については、唐張儒氏『魏晉南北朝史論叢續編』（中華書局、二〇一一年）「北魏的青齊土民」を参照。唐氏は平斉民として平原劉氏や東河崔氏等を挙げている。なお、平原劉氏と劉孝標については、榎本あゆち氏「劉孝標をめぐる人々―南朝政治史上の平原劉氏―」（『六朝学術学会報』第十五集、二〇一五年）に詳しい。

11 谷川道男氏『増補隋唐帝国形成史論』（筑摩書房、一九九八年）第Ⅱ編「北魏統一帝国の支配構造と貴族制社会」第三章「北魏末の内乱と城民」（二〇八頁）

- 12 徳泉さち氏「平斉民が北魏書法に与えた影響」(『WASEDA RILAS JOURNAL』巻九、二〇二二年)。
 - 13 王肅については『魏書』巻五一に伝がある。そこには「王肅、字恭懿、瑯邪臨沂人。司馬衍丞相導之後也。父奐、蕭隲尚書左僕射。肅少而聰辯、涉獵經史、頗有大志。仕蕭隲、歷著作郎・太子舍人・司徒主簿・秘書丞。肅自謂『禮』・『易』爲長、亦未能通其大義也。父奐及兄弟並爲蕭隲所殺、肅自建業來奔。是歲、太和十七年也。」とあり、彼は斉の武帝である蕭隲により父と兄弟が殺され、北魏に亡命した南朝出身の人士である。
 - 14 陳寅恪氏『隋唐制度淵源略論稿』(江蘇人民出版社、二〇二〇年)一一頁には、劉芳の他、同様な境遇にいた崔光も例に挙げて以下のようにある。「劉芳・崔光皆南朝俘虜、其所以見知於魏孝文及其嗣主者、乃以北朝正欲摹倣南朝之典章文物、而適值其會、故能拔起俘囚、致身通顯。」とある。ちなみに先の王肅も北魏に南朝の文化を伝えた人物であるとしている。
 - 15 川本芳昭氏『中華の崩壊と拡大 魏晉南北朝』(講談社学術文庫、二〇二〇年、初出は二〇〇五年)第七章「北魏孝文帝的改革」(二四三頁)及び田村實造氏「北魏孝文帝的政治」(『東洋史研究』巻四一、三三、一九八二年)参照。
 - 16 『玉函山房輯佚書』(中文出版社、一九七九年)經編詩類第二一冊及び經編禮記類第三四冊。『太平御覽』や『文選』李善注、『礼記正義』等に引用されていたものを蒐集している。
 - 17 『隋書』巻三二、經籍志の序に「……孝文徙都洛邑、借書於齊、祕府之中、稍以充實。」とある。
 - 18 吉川忠夫氏「北魏孝文帝借書攷」(『東方学』九六輯、一九九八年後に『六朝隋唐文史哲論集Ⅰ』(法藏館、二〇二〇年所収)。
 - 19 本伝に、劉僧利は、高祖が徐州に行幸した時に引見し、徐州別駕に取り立てられたとある。
 - 20 『北齊書』の本伝は禪に作り、「新唐書」宰相世系表は偉に作り、「唐贈太子少保劉知柔神道碑」は禪に作る。本稿では劉禪と統一して表記する。
 - 21 北齊の文林館については、尾崎康氏「北齊の文林館と修文殿御覽」(『史学』四〇巻、第二・三三、一九六七年)を参照。
 - 22 引用は『宣和書譜』(浙江人民美術出版社、二〇二二年)に拠る。
 - 23 吉川忠夫氏「顔之推小論」(『東洋史研究』二〇巻、第五号、一九六二年後に「顔之推論」として『六朝精神史研究』(同朋舎出版、一九八四年所収)。
- 二六九頁に「顔之推も、梁の文帝治下の空氣を吸って育った江南文化人であるがゆえに、北齊貴族社會から歓迎をうけたであろうし、たしかに江南人としての矜持が、亡命者たる彼をわずかに支えていたかのようにもみえる。」とある。

- 24 古勝隆一氏は「隋代儒教の地域性―特に山東儒者について」(船山徹氏編『中国印度宗教史』とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性)『科学研究費、二〇一一年』後に『中国中古の学術と社会』(法蔵館、二〇二二年所収) 中文版は「隋代儒家的地域性…以山東為中心」として『林慶彰教授七秩華誕壽慶論文集』(万卷楼圖書公司、二〇一八年) 後に『漢唐注疏寫本研究』(社会科学文獻出版社、二〇二一年所収) で北齊から隋の学界に加わった集団、特に「冀州」・「兗州」を本貫とする人士は「山東儒者」として伝統的な儒学を保有し、隋の学界において優位性を誇っていたと指摘している。劉務本は北齊から隋に加わっていることから、隋においても北朝期と同じく家格を著しく落とすことはなかったとも考えられる。
- 25 『隋書』卷七六、文学伝。
- 26 劉知幾が監修国史であった蕭至忠に史局の欠点を指摘した上書は、『史通』忤時篇に収録されている。
- 27 以下の引用は『史通通釈(清代學術名著叢刊)』(上海古籍出版社、二〇〇九年)に拠る。
- 28 井上進氏『中国出版文化史』(名古屋大学出版会、二〇〇二年)第六章「新旧の相克」引用は一〇一頁から。
- 29 劉知幾の經書批判については稲葉一郎氏「中唐の新儒家運動の一考察―劉知幾の經書批判と啖・趙・陸氏の春秋学―」(『中国中世史研究』、東海大学出版会、一九七〇年)、後に「劉知幾の經書批判と中唐の新儒学運動」『中国史学史の研究』(京都大学学術出版会、二〇〇六年所収)を参照。
- 30 中唐期における「章句の学」からの脱却は、例えば杜佑が『通典』の序で「佑少嘗讀書、而性且蒙固、不達術數之藝、不好章句之學」と自らの学問的立場について明言していることから知ることができる。『通典(中国史学基本典籍叢刊)』(中華書局、二〇一六年)に拠る。